

平成18年度 社会体育研究所主催 「Yesterday Today Tomorrow 昨日 今日 そして明日へ」 上映報告

報告者：平田大輔（文学部） 佐藤雅幸（経済学部）

6月29日、授業（保健体育科目）の一環として、タイ北部の村でHIVに感染しながらも、生きる希望を失わない家族の姿を3年間にわたり見つめたドキュメンタリー映画「Yesterday Today Tomorrow 昨日 今日 そして明日へ」（製作・アジアプレス・インターナショナル・2005バンコク国際映画祭出品作品）を上映、約1200人の学生が鑑賞した。

WHOの報告では、世界のエイズ感染者は5000万人に達したという。日本でも近年、増加傾向にあり、特に20代にHIV感染が広がっているという。

この映画は、HIV/Aidsに対して問題であることを解説したり、くどくどと説明することなく、主役達の毎日の生活からHIVが人の感情や生活に与える影響を十分に物語っていて、HIVに感染して同情を呼び起こすものではない。このあるがままに見据えたドキュメンタリーから学生たちには、「社会に何か強い提唱を投げかけるような作品ではない。価値観を押し付けるようなことせず、この映画をみて何かを感じるかは見る人に任せるようにした」と述べた映画監督の

直井さんの言葉にあるように、ナレーションや音楽が入っていない中、ときおりインタビューだけを交えながら、エイズ感染者たちの淡々とした日常生活の中から何かを感じとってほしい。

映画の中の彼らは、死というものをまじかに感じているにも関わらず、今この瞬間を生きていることを大切にし、その生は他の人間よりも輝いているように見える。エイズ患者に限らず死というものはすべての人間に訪れるが、死から逃げずに真正面から向き合っこそ生の部分も充実してくるのではないだろうか。残された時間のわずかなエイズ感染者たちはいやがうえにも死と向き合わねばならず、そこには退屈な日常などというものは存在しないのである。彼らがしたり、言ったりすることの全てが、いかもともであることが理解でき、またそれ以外には選択の余地がないという痛ましい事実には気づいてほしい。

コーディネーターを勤めた佐藤雅幸経済学部教授は「この映画を通じてHIVに対する正しい理解と命ある限り、今この瞬間をしっかりと生き

ていくという意味を学生達が感じてくれれば」と企画の意図を話した。

研究所では今後、監督を招いてパネルディスカッションなども行っていきたいと考えている。

映画内容

夫からエイズに感染したアンナは、夫をなくした翌年、村の病院でポムと出会い結婚。平日は村で魚や蛙の行商人として働き、農繁期ともなると、農作業に精を出す。2人はさまざまな悩みを抱えながらも、感情をかきたてることなく、心穏やかに日々を送る。隣郡に住むボーイは、小学校1年生。体調を崩して休校し、両親が働く果樹園で1日を過ごす。母親に勉強を教えて貰いながら、再入学の準備中。新学期から小学校に無事再入学したボーイだが、半年後にエイズを発症し、病院での入院生活が始まる。2家族の生活の中にゆっくりと流れる時間、そしてアンナとポム、ボーイの生きざまを通して、生の根をじっくりと見つめていく。(プレスリリースより)

監督メッセージ

『タイ北部に位置するパヤオ県。「昨日 今日そして明日へ…」は、丘陵に囲まれた自然豊かな農村に暮らす2家族のHIV感染者たちの生活を、3年間にわたり記録したドキュメンタリー映画です。生の不安に向き合いながら、今この瞬間を生き続ける感染者たち。この映画では、HIV感染者たちの日常生活を通して、彼らの抱えている思い、喜びや哀しみ、そして人間の生死の有り様を描きました。』

監督の直井里予さんは本学テニス部で活躍し、その後アメリカ留学を経て現在、近畿大学健康スポーツ教育センター専任講師を務める直井愛里さん(平7経営)の実姉である。



上映に先立ち、趣旨を説明する長島博所長



鑑賞する学生